

---

# たかが芸人

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

たかが芸人

### 【Nコード】

N65360

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

自称野球通の芸人がいた。彼はあるチームの太鼓持ちばかりしていた。だが球界で騒動が起こった時彼はそのチームをバックに醜い発言を続けた結果。球界再編の時にあまりにも目に余ったある芸能人をモデルにしました。

## 第一章

たかが芸人

醜い男である。何もかも。

顔立ち自体はそれ程度悪くはない。穏やかな目元に細長い顔。それはよく街で見るとごく普通のサラリーマンのものと言っても問題はない。スーツがよく似合いそんな身体つきでもある。

しかし表情がだ。常に歪み卑しいものを見せている。そしてそれが言葉にも出ていた。

鬘麦助は芸人だ。その仕事はというとだ。

「また来たよ」

「本当にね」

「来るなつての」

誰かの家にあがりこんでただ飯を食らうのが仕事である。それだけで食っているととっても過言ではない。そしてその他にもだ。こんなことをしている。

野球について造詣が深いと自分では思っている。そしてである。

「あのね、虚塵軍こそがですね」

「球界の盟主なんですよ」

「常に正しいんですよ」

こう言っているだけである。しかもだ。

毎年春にはだ。こう言うことでも有名だ。

「今年は虚塵がぶつちぎりですね」

「また優勝ですよ」

「他の球団のファンの皆さんすいません」

他人を馬鹿にしきつた顔で言う。こんな男だ。

とにかく浅ましく卑しい男であった。それで自分以外の全ての人間から蔑まれ卑しく見られていた。実際にあるチームの監督はこう言っていた。

「あいつをわしの前に連れて来るな」

かつて一代の名キャッチャー、そして強打者だった村野監督だ。今では知将と言われている。白髪とずんぐりした身体、それに眼鏡がトレードマークだ。

その彼は麦助が嫌いだった。それでこう言っていたのだ。そしてだ。こつも言っていた。

「あいつは野球が好きなんやない」

「じゃあ何が好きなんですか？」

「自分を野球通って言ってますけれど」

「あいつが好きなのは権力や」

それだというのである。

「それと金や」

「そういうのがですか」

「好きなんです」

「虚塵のゴマすつておこぼれにあずかっただけや」

かなり辛辣だが事実であった。何しろ麦助はだ。虚塵の太鼓持ちや犬と呼ばれていた。犬と呼ぶと犬が可哀想という言葉もあった。

「それで何で野球ファンなんや」

「そうですね。嫌な奴ですしね」

「僕もあいつ嫌いなんです」

「俺もです」

「あんな好きな奴はおかしいんや」

村野はこつまで言った。

「ああいう奴が大手を振って歩ける。日本はおかしな国になったわ」

「全くですね」

「それは確かに」

周りもその言葉に頷く。

「全く。どうにかありませんかね」

「あいつは」

「どうにかなって欲しいんですがね」

「ああ、あいつはな」

村野はその彼のことを忌々しげに話した。

「そのうち終わるわ」

「終わりますか」

「ああ、終わるで」

また話した。

「ああいう奴は自滅するのが常やからな」

「だといいんですけれどね」

「本当にね」

「まあ見ておくんやな」

村野はここでは余裕を見せた。

「どうなるかな」

「まあそこまで言われるのなら」

「ちよつと見させてもらいますね」

「それじゃあ」

周りは村野のその言葉を今一つ信じられなかった。だがそれでも

ここは言うのであった。

そして見ているとだった。

## 第二章

騒動が起こった。麦助が鼻屑をしているその球団がだ。ドラフトのルールを破ってまだ中学生の選手を指名してきたのである。

これには世論も呆れた。

「おい、幾ら何でもそれはないだろ」

「幾ら天才でもまだ中学生だろ」

「それでも指名するか？」

「何処まで無法なんだ」

誰もが啞然となり批判した。しかしである。

麦助はだ。こう力説したのだった。

「いや、あれはいいんだよ」

「何でいいんだ？」

「全然理屈に合わないだろ」

「相手は中学生だぞ」

「若い優れた人材を世に出すんだよ」

これが麦助の主張であった。

「それっていいことじゃないか」

「御前そりや虚塵のオーナーの言葉じゃないか」

「完全にオウム返しじゃないか」

「それでいいのかよ」

「オーナーの言葉にも一理あるじゃないか」

あくまでこう言うのだった。

「そうじゃないのか？」

「さて、その時が来たで」

村野は麦助のこうした発言を聞いて言った。

「機は熟したりや」

「そうなんですか」

「今なんですか」

「そや。あいつは自分で自分の墓穴を掘ったんや」

「こう周りに話すのだった。」

「後はそこに落ちるだけや」

「だといいんですがね」

「そうなれば」

「絶対になる。自分で落ちるで」

彼はこう断言した。そしてである。

深夜のテレビ番組でもこのことが議題に挙げられた。そこにはプロ野球選手会からも選手会長が来て話をする。麦助は呼ばれないの  
に来た。

「やっぱり俺が来ないと駄目だろ」

「いや、あんた呼ぶ予定なかったんだけれど」

司会者の男が彼にこう言う。

「あなたの事務所がどうしてもって言うしね」

「そりやそうだろ。俺は野球通だからな」

「あんたは只の太鼓持ちじゃないの？」

司会者がここまで言ってもだ。麦助は平気だった。

「俺は野球のことは何でも知ってるんだ。聞いてくれよ」

「だといいいけれどね」

「俺の席はここだな」

その仕方なく用意された席に着いてであった。議論に無理矢理加  
わったのだった。

選手会長はだ。真面目な態度で話した。

「やっぱりこれはやつちやいけないことなんですよ」

「うん、そうですね」

「流石にね」

周りもその言葉に頷く。

「中学生ですしね、彼は」

「それを考えたら」

「それをあえてやった。選手会としては反対します」

「こう言い終えるとだった。麦助が言った。

「いや、選手会が反対してもね」

「反対しても？」

「何かあるんですか？」

「もう指名したじゃないですか」

彼はこう主張するのだった。



### 第三章

「後は入団会見だけですよ」

「まだ入るって決まったわけじゃないですよ」

「あの、それわかってます？」

「虚塵に入りたくない人なんていないんですよ」

傲慢な態度でこう主張するのだった。

「違います？天下の虚塵ですよ」

「いや、そういう問題じゃないですから」

「これって」

「そうですね、中学生を指名って」

「あからさまな協定違反じゃないですか」

「協定なんかどうとでもなるんですよ」

今度はこう言う始末だった。

「虚塵の前にはね」

「いえ、そういう訳にはいきませんから」

選手会長はその麦助に真面目な態度で反論する。

「ですから。これはですね」

「はい？貴方まだ言ってるんですか？」

その会長にだ。あからさまに馬鹿にした態度で返した。

「貴方の意見なんてね。弱小球団の人の意見なんてね」

「どうだっているんですか？」

「一体」

「虚塵の前には何でもないんですよ」

こう周囲のいぶかしむ声に返した。

「所詮はね。選手会だってそうですね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いいですか？虚塵は今回もいいことをしてるんですよ」

ここからさらに話すのだった。そして後は勝手に喋りまくった。

それを他の参加者も視聴者も眉を顰めさせて聴き、観たのだった。その結果だ。

まず麦助の事務所にだ。抗議の電話が殺到した。

「ふざけるな！」

「何だあいつの発言は！」

「ヤクザかゴロツキか！」

「二度とテレビに出すな！」

「首にしろ、首に！」

電話だけでなくファックスでもメールでもだ。抗議が殺到した。番組スタッフにもだ。抗議が殺到した。

「何であいつを出したんだ！」

「虚塵の犬かあいつは！」

「夕刊キムとどう違うんだ！」

「もう二度と出すな！」

野球を愛する全ての者が麦助に怒りを感じた。そうしてだった。本職らしい落語の場においてもだ。彼が出るとだ。

「消えろ！」

「落語界からいなくなれ！」

「手前の顔なんか見たくもねえ！」

「出て行け！」

座布団はおろか空き缶やゴミまで投げ付けられる。最早落語どころではなかった。

彼は完全に干されてしまった。テレビに出られなくなった。

それでブログでしか発言できなくなった。しかしであった。

「あと一撃やな」

村野がここでまた言った。

「もう一回あるで」

「ありますか」

「また」

「ああいう奴は続けて自爆する」

だからだというのだ。

「それでや」

「続きますか」

「そうなるんですね」

「そや。まあ見てるんや」

自信たっぷりに言うのであった。

「それをな」

「そうなればいいですけどね」

「本当に」

周りは半信半疑だった。むしろ疑いの方が多かった。

果たして村野の言う通りになるのかと思っていた。しかしだった。また虚塵のオーナーがだ。選手会からの抗議に対して言ったのだ。つた。

「無礼を言うな」

そしてであった。

「たかが選手が」

誰もがこの発言に激怒した。そして批判は最早頂点に達した。

その時だった。麦助も一緒に言ってしまった。

その数少ない意見が言える場所となったブログでだ。彼は言った。

「まあたかが選手だしね」

このあまりにも無神経かつ本音が出た言葉にだ。野球ファン達は彼にも怒りを向けたのだ。当然と言えば当然のことである。

## 第四章

「はあ！？ふざけるな！」

「また言ったのか！」

「オーナーの犬が！」

「太鼓持ちだ！」

こうしてブログには怒りの書き込みが殺到した。

そして事務所にもさらに抗議が来てであった。

遂に事務所を解雇された。落語界からも永久追放になってしまった。

それを見てだ。村野はまた言った。

「この通りや」

「本当に終わりましたね」

「事務所もクビになりましたし」

「落語界からも」

「当然の結末や」

村野は冷めた声であった。

「これもな」

「当然ですか」

「ああなっただのは」

「言っただやろ。ああいう奴は自滅するんや」

そうなるというのである。

「それでや」

「何かね、たかが選手ってというのはね」

「あんまりですよね」

「ですよ。オーナーも酷いですが」

「それに便乗したあいつも」

「所詮はや」

村野はだ。ここでこう言ってみせたのだった。

「たかが芸人や」

「たかが、ですね」

「あいつも」

「人間誰しもたかがなんや。それをあのチームのファンで芸人って  
いうだけでや」

「あそこまで威張って」

「それでなんですね」

周りもこれでわかったのだった。

「破滅ですか」

「そうなるってことですか」

「そういうこつちや。自分が招いたことや」

眼鏡の奥の目がここで光った。

「ああなるしかなかったんや」

「そういうことなんですね」

「成程」

そしてだ。麦助はだ。

公園の端でだ。子供達に言われていた。

「あつ、麦助だ」

「馬鹿だ」

「うん、アホがいるよ」

「うるせえ、ガキ共」

みすぼらしい姿で子供達に言い返す。

「俺はな、野球と落語にかけてはな」

「お母さんが言ってたぞ」

「御前は最低の人間だってな」

「そんな奴はここにいるな」

こつ言っただ。石を投げるのだった。

「汚い奴は何処かに行けよ」

「そつだよ、たかが芸人だろ？」

「もう芸人じゃないけれどな」

「くっ、こいつ等……」

怒りのあまり子供達を殴ろうとする。しかしだ。

その尻をだつた。子供達が連れている犬に噛まれたのだった。

「痛っ！この馬鹿犬」

「よし、メリーやっちまえ」

「容赦するんじゃないぞ」

犬に追いたてられてだ。ほうほうのていで逃げ出すのだった。

そして末路は誰も知らない。あの人は今、といった番組でも話に出されることはなくだ。ただ一人の愚か者がいたことだけが語られるのだった。たかが芸人として。

たかが芸人

完

2010・9・29

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6536o/>

---

たかが芸人

2010年11月1日22時55分発行